令和8年度 全国学力・学習状況調査 結果について

HP 用

生駒市立緑ヶ丘中学校

<教科に関する調査結果（学力調査と生徒質問紙）から>

各教科において、知識・技能、思考・判断・表現の2観点どちらにおいても平均正答率が奈良県・全国の平均を上回っている。特に知識・技能の観点の正答率が高く、基礎・基本となる学力が定着していると考えられる。

【国語】

全体の平均が68%と全国（61%）や奈良県（63.9%）の平均を上回っており、国語力においては一定の成果を上げていると言える。特に「情報の扱い方に関する事項」における項目では、77.7%と奈良県の平均（67.8%）より、10%も高く、単純な読み書きの項目だけでなく、多くの情報を論理的に思考し判断する力が身についていると言える。これまでの取り組みとしては、単純に教科書の文章を読み進めていくだけでなく、その作品と自分自身をつなぎ合わせて考えたり、自分ならどのようなことを考えるかをまとめさせたりした。どの教科でもいえることだが、語彙力や文法、言葉の知識は考える力の基礎となる部分なので、3年間を通じて漢字や言葉、文法事項については丁寧に授業を行った。本校だけでなく、奈良県、全国にも言えることだが、やはり自ら解答を書くということは苦手であるようで、記述式の正答率が、選択式や短答式に比べ、とても低くなっている。選択式の問題であれば、正しいもの間違っているものを比較するだけでよいが、一から解答を書くとなるとハードルが高いようである。このことは今回の調査だけでなく、定期考査や実力テストでも同様のことが言える。まずは、こどもたちが書くということに対しての苦手意識をなくすことが大切であると考える。授業でも一問一答形式にならないよう、子どもたちに考えさせ、そしてその考えを書くというところまでこだわって授業を行う必要があると感じた。ただし、先で述べたように、そもそもの苦手意識を取り除く必要があるので、まずは簡単なものから書かせて、徐々に難易度を上げていく必要があるとも感じている。

【数学】

平均正答率が63%で、全国平均57%や奈良県平均56%と比較すると高い。「具体的な場面において、正の数と負の数を用いて変化や状況を表すことができるかどうかをみる」91.7%、「箱ひげ図と四分位数の対応について理解しているかどうかをみる」82.6%、「与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができるかどうかをみる」81.8%と、かなり高い正答率である。さらに、「反比例」71.9%、「確率」75.2%、「文字を使って説明する」70.2%についても高い正答率である。また、難しい問題についても答えを導きだそうとしているため、無回答は1問もなかった。教科書に準拠したワークを用いて、繰り返し演習をしたことが成果につながったと思われる。大型 TV 画面と、デジタル教科書を使って、視覚的にわかりやすく学べたことがよかったと思われる。証明問題については、授業で根拠になる部分を大切にし、筋道を立てて説明することを丁寧に指導してきたことがよかったと思われる。①「データの傾向を的確に捉え、判断の理由を度数分布多角形の特徴を基に説明することができるかどうかをみる」②「数学的に表現したことを事象に即して解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる」③「統合的・発展的に考え、事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる」などの正答率が低い。なかでも①については、正答率が30.6%で、全国

平均31.9%よりも低い。学習内容が、実際の生活の中でも登場することを伝え、学んだことを実生活に活用できるようにさせたい。授業の中で、生徒同士で考えたり、交流し合うなど、その事象について、説明できる力をつけさせたい。

【英語】

正答率 70%以上の問題は、問 1（70.8%）、問 2（88.1%）、問 3（84.6%）、問 5（70.0%）、問 6（70.0%）、問 7（85.0%）、問 11①（78.3%）、問 11②（72.5%）であった。特に、問 2 や問 3 の「アナウンスや説明を聞き、行くべき場所を選択する」問題など音声から目的に応じて必要な情報を聞き取ったりする力が身に付いている。また問 7 のように「メールを読み、最も適切な時刻を選択する」問題など文章を読み取ったりする力や、問 11 の「留学生の昨日の出来事を説明する英文を書く」問題に見られる与えられた情報を基に基本的な英文を書く力も身に付いている。多くの問題で全国・県の正答率を上回っており、基礎的な英語力が定着していると考えられる。日頃から、実際の生活場面を意識した題材を用い、「何を聞き取るのか、何を読み取るのか」という目的を明確にしたリスニング・リーディング活動を行ってきた成果と考えられる。
また、英文を読んだり聞いたりするだけでなく、内容を確認した後に短い英文で表現する活動や、語順・時制などの基本事項を繰り返し活用する活動を取り入れてきたことが、インプットした英語を実際に使う力の定着につながったと考えられる。正答率 50%未満の問題は、問 4（43.6%）、問 10（2）（31.7%）、問 14（46.2%）であった。問 4 は、聞いた内容全体を捉え、出来事の順序を整理する力に課題が見られる。問 10（2）は、文章を読んで内容を理解した上で、自分の考えとその理由を英文で表現する力に課題がある。また、問 14 は「学校で普段行うことについて説明を書く」問題で、無解答率も 15.4%と高い。与えられた情報を基に英文を書く問題はよくできている一方で、自分で内容を考え、整理してまとまりのある英文を書くことには難しさがあると考えられる。
今後は「聞く・読む」で終わらず、聞いたり読んだりした内容を基に、自分の考えを英語で表現する活動を日常的に取り入れる。具体的には、「内容を捉える→キーワードを整理する→自分の考えを決める→理由を考える→英文にする」という流れを授業の中で繰り返し経験させる。また、“I think ～ because …”などの基本的な表現を活用した短いライティングを継続して行い、徐々に支援を減らして自力で書けるようにするなどの工夫を行う。リスニングについても、キーワードだけでなく、出来事の順序や話全体の概要をメモしながら聞く活動を取り入れる。さらに、書く前に日本語やキーワードで内容を整理する時間を設けることで、生徒自身の英作文のハードルを下げ、自分の考えを最後まで英文で表現する力の育成を図る。

【生活・行動や考えに関する調査結果から】

始めに、ICT 機器を使って作業する、まとめることができるなどの割合が高く、「1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」で肯定的な答えの割合が高く、これまでの学習を通して、表現力や伝える力が着実に身に付いていることがうかがえる。また、授業の中で生徒が自分の考えを工夫して表現できるような授業づくりを意識している。

次に、「地域や社会を良くするために何かしてみたいと思いますか」「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」で肯定的な答えの割合が高く、自己有用感が高い傾向にあると思われる。これに関しては、普段の生活を通して、前向きな言葉を投げかけるようにしている。また、学年や学校行事の運営を生徒主体で行うようにしている。次に、「朝食を毎日食べている」や「毎日、同じくらいの時間に起きている」など、基本的な生活習慣にかかわる質問内容にて、できていると答えている割合が高く、比較的基本的な生活習慣が身についてい

る。学習習慣にかかわる質問内容にて、学校の授業時間以外で、普段（月曜日から金曜日）、1日当たり2時間以上、学習に取り組んでいる割合が高く、学習習慣が身についている。学校生活の中でも、時間を守ることや、決まりを守って、規則正しく生活することを意識して行動するよう指導した。

次に、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」で肯定的な答えの割合が低く、教員との関わりはあるものの、相談することへの心理的なハードルを感じている生徒がいる。一人で抱え込まないよう、相談しやすい環境づくりを続けることと、安心して気持ちを伝えられるよう、引き続き見守りと支援を行っていく。また、「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」で全国平均と比べて肯定的な答えの割合が低く、失敗を恐れたり、正解を求めたりする傾向があり、自分なりの方法を試行錯誤する意識が十分に育っていない可能性がある。分からないことがあるときに、自分で調べたり工夫したりすることにやや苦手さが見られるので、今後は、調べ学習や探究的な学習活動を充実させ、主体的に学ぶ力の育成を図っていく。最後に、「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか」で全国平均と比べて肯定的な答えの割合が低く、生徒が十分理解できている場合や「分かるまで教えてもらえた」と実感するまでに至っていない場合がある。全体的に、学習に真面目に取り組んでいるので、疑問に感じたことをそのままにせず、質問や確認を通して理解しようとする習慣を身に付けられるよう、こちらから声掛けをするなど支援していく。